

Bookstart Newsletter



2022
春
No.76

ブックスタート・ニュースレター



東京学芸大学附属世田谷中学校

特集

「ブックスタート」を授業で紹介 ～ 未来を担う中学生に伝えられること～

「生徒にブックスタートを紹介したいので、協力してもらえませんか」
2020年4月、中学校の先生からこのような問い合わせがありました。お話を聞くと、家庭科の授業でブックスタートを取り上げ、絵本を紹介した親子の関わりについて生徒に伝えたい、とのことでした。

家庭科の学習指導要領(※)には、幼児の生活や発達を知り、よりよい関わり方について学ぶことが示されています。また、子育て世帯と地域のつながりについても勉強します。ブックスタートは、こうした学びを助ける、優れた教材になるといえます。「絵本がコミュニケーションツールになることを知り、将来子どもと心を通わせられる大人になってほしい」というのが先生の願いです。

授業で紹介されることで、自治体にとっては、地域の未来を担う子どもたちにブックスタートについて伝える機会になります。それが、将来的に事業継続の力になるかもしれません。

今回の特集では、中学校での実践を手掛かりに、ブックスタートを授業で活用する方法を紹介します。

※中学校学習指導要領(平成29年告示) 解説
技術・家庭編及び高等学校学習指導要領(平成30年告示) 解説 家庭編(文部科学省)

東京学芸大学附属世田谷中学校
シェアブックス (Share books) の
楽しさに気づいた中学生

2021年秋。授業が行われたのは、東京学芸大学附属世田谷中学校です。

家庭科教諭の関野かなえさんは、前年度から、幼児の発達について学ぶ授業の準備を進めてきました。絵本を授業で活用したいと考え、学校司書の村上恭子さんに相談。発達に合った絵本を選書する内容で、4時間構成の授業を計画しました。(左図)

当NPOはその4時間目の講師として声をかけていただき、授業に参加しました。各1時間で4クラス、

●授業の構成●

ねらい	・幼児の発達を学び、幼児への理解を深める ・幼児が育つ環境、大人の役割を理解する
1 時間目	・絵本を読み、子どもの頃を振り返る ・自分が担当する年齢の発達を調べる
2 時間目	・学校司書から読みきかせについて学ぶ ・発達に合った絵本を選書する
3 時間目	・保育園児と交流し読みきかせをする
4 時間目	・グループ内で発表し選書絵本を紹介する ・ブックスタートに関する話を聞く

計137名の3年生が対象です。

「よろしくお願ひします!」と挨拶をしながら席に着いた生徒たち。幼児のために自ら選んだ絵本を手に、グループで円卓を囲みます。

「館長」と呼ばれ親しまれている村上さんと共に、関野さんが優しい眼差しを生徒に向け、語りかけます。

「今日の学びを通して、幼児の心身の発達を支える大人の役割を自覚し、将来に向けて幼児と心と心をつなぐ機会としましょう」

最後の授業は、3時間目までの振り返りから始まりました。

学びを活かして園児へ読みきかせ

1・2時間目では、幼児の発達について調べます。担当の年齢を決め、「言語」「情緒」など生徒自ら視点を設定してまとめていきました。そして「この年齢の子どもにはどんな絵本を選んだら楽しめるだろう」と、読み手側の視点で絵本を選ぶ活動を行いました。これらを通して、幼児の発達を学び、発達における大人の役割を理解することがねらいです。

また「幼児と実際に関わる機会をもたせたい」と考えた関野さんは、3時間目に保育園の園児を招いて触れ合い体験を実施しました。園児と

実際に触れ合い、絵本を楽しむ体験により、生徒の家庭科の学びを深めることができたといえます。



目の前にいる園児の気持ちを第一に考えながら、練習の成果を発揮しました

絵本を選ぶ視点の多様さ

最後となる4時間目の授業では、調べたことや触れ合い体験をもとにグループ内で発表を行いました。絵本の選書理由については「楽しく言葉覚えられそう」「自立を助けることにもつながるんじゃないか」などの教育的な視点にとどまらず「ストーリーから安心感をあげられたらいいなと思った」「まずは絵本を楽しんでほしい」「人との関わりの中で育つっていうのが大事だと思う」など、楽しさや触れ合いに目を向けたいという思いを話す生徒もいて、様々な考えが共有されていました。



選書した絵本を読み合う生徒

ブックスタートの映像に「ハイパー」

授業のまとめを担当した当NPOからは、ブックスタートの活動について紹介しました。ある自治体の実際の映像で赤ちゃんの様子を見てもらうと「わあ、絵本めっちゃ見てる!」「こんなに笑うんだ!」と声が上がります。「お母さんにも注目してみてください。赤ちゃんを見て、とつても嬉しそうなんですよ」と促すと、大きく頷く生徒もいました。

続けて、活

動の目的を伝えました。

「赤ちゃんは大好きな人に語りかけたらいいよ」と語りかけると、嬉し



映像をもとに話すNPOブックスタートの職員

とがすごく嬉しい。大人も、絵本を通して語りかけると、ゆったりとした気持ちになれる。そんなシェアブックス (Share books)

のひとつですが、すべての赤ちゃんのまわりで持たれることを、ブックスタートは目指しています」

話にじっと耳を傾ける生徒たち。自治体がブックスタートを通して親子に届けているメッセージは、中学生の心にも響いたようです。

1000 Interview
インタビュー



東京学芸大学附属世田谷中学校
家庭科教諭 関野かなえさん(写真左)
学校司書 村上恭子さん(写真右)

なぜブックスタートを中学生に紹介しようと考えたのでしょうか。

「社会」の視点で子育てを捉えられる

関野 普段、生徒は子育ての様子を身近で見る機会がほとんどありません。そのため、いざ親になった時に子どもとの関わり方が分からず、戸惑うこともあると思います。ブックスタートについて知る中で、絵本が

親子で心を通わせ合う手段になることや、子どもの成長には愛される経験が必要だと中学生の時期に学べることに大きな意味があると思います。

また、今回の授業を通して、子どもが健やかに育つためには、家庭だけでなく、社会全体で子どもを育むことが重要だと気づけたことも大切な学びになったと感じています。

「本の力」は赤ちゃんにも

村上 「本の力」にも注目したいです。絵本は、大事なものを凝縮して残したものだと思います。長く読み継がれる絵本は、子どもたちに本の楽しさを伝えてくれます。本を楽しむことは人生を豊かにする幸せの形の一つ。その最初のきっかけを絵本を通して届けるブックスタートで、赤ちゃんがあれだけ喜ぶのだということ、137人の生徒に伝えられたのはすごいことですよ。

中学校以外でも、ブックスタートを取り上げることができませんか。

どの学校でも授業に活かせる

関野 小学校の「総合的な学習の時間」や高校の家庭科でも紹介できる

と思います。「総合的な学習の時間」では、地域に関する学習についても扱います。また、中学・高校の家庭科では「幼児の発達」のほかにも「地域との関わり」についても履修します。実際にブックスタートに関わっている市民ボランティアや自治体職員をゲストティーチャーとして迎えられると、実感をもって学べると思います。

中で営まれるものと気づいてもらうためにも、ブックスタートのような話が必要かもしれません。

おわりに

今回の事例から、親子への支援というブックスタートの従来の役割と異なる、新たな可能性を見出すことができました。今年に入って関西地区の中学校からも同様の問い合わせが届いています。生徒に価値ある学びを提供できる方法として学校に周知していくことで、事業にもさらなる広がりが見られるかもしれません。

小学校ではこんな取り組みも！

赤ちゃん登校日（鳥取県境港市）

境港市では、小学生と赤ちゃんがふれあう授業を実施しています。自分がブックスタートで受け取った絵本を持参して赤ちゃんに読みかかせをした子は「なぜかよくわからないのだけど、この絵本は赤ちゃんの頃からずっと本棚の中に入っていたんです」と話します。

赤ちゃん登校日の取り組みは、子どもたちにとって、かつて周りの人と楽しんだ思い出のつまった絵本を久しぶりに手にしたり、赤ちゃんとおふれあったりする中で、自分がどんなふうに愛され、見守られて成長してきたのかを感じる機会にもなっています。



／行ってきました！／

東京都立川市

会場をロビーに変更して活動を再開

「こんなに小さな赤ちゃんでも絵をじっくり見るんですね」
絵本をじっと見つめたり、笑ったりする赤ちゃんのそばで、保護者とボランティアが楽しそうに会話をしています。

コロナ禍にあっても、親子と対話しながら絵本を手渡している立川市のブックスタート。感染が拡大した2020年春以降、集団健診の中止に伴い絵本を郵送していましたが、同年秋に健診とブックスタートを再開しました。

再開後の健診では、密を避けるため、絵本の読みきかせに使用していた部屋が問診に使われることになりました。そこで、子ども家庭支援センターと健康推進課が話し合い、待合のロビーで、健診のあとにブックスタートを行うことにしました。

行政にとっても親子にとっても一番良いやり方を

健診とともにブックスタートを再開した理由を、健康推進課の二橋基行さんに伺いました。「絵本を郵送するのは簡単です。でも、一方的に送るだけでは、赤ちゃんとの絵本の時間とはどういうものなのか、なぜ市が事業として行うのが保護者に伝わりません。行政にとっても親子にとっても、一番よいやり方は何かを考えると、親子が来る



健診会場で、直接伝えながら絵本を手渡すことが、この事業には必要だと思いました」

コロナ禍だからこそ、ほっとできるひとときを

ブックスタートでは最初に、親子の状況に応じた子育て支援情報を、ポイントを絞って説明します。絵本については、概要や楽しみ方の紹介を基本としていますが、密にならない状況であれば読みきかせを行うなど、時間短縮を意識しつつ、臨機応変に対応しています。

「読みきかせをして、『赤ちゃん、見てますね』と伝えると、保護者が本当に嬉しそうにするんですよ」とボランティアさん。

子ども家庭支援センター職員の村上久美子さんは、コロナ禍の出産や育児で、保護者の不安や孤立感が以前よりも増していると言います。「出産後も祖父母や友人に会えず、『赤ちゃんの誕生をお祝いしてほしかった』『成長を見てほしかった』と涙ながらに話す方や、『久しぶりに大人と話した』という保護者もいます。ほんの少しの時間でも、対面して言葉を交わす意味を感じます」と話してくれました。

「このような状況だからこそ、ブックスタートでほっとするひとときを過ごして欲しいです」そう語る立川市の皆さん。その思いは、コロナ禍に置かれた保護者の心をそっと支えています。

●立川市ブックスタート事業●

開始年月：2007年8月 年間出生数：約1200人
実施機会：3～4か月児健診 事務局：子ども家庭支援センター
連携体制：子ども家庭支援センター、健康推進課、図書館、ボランティア



◀お母さんのおひざの上でゆったり

ロビーの椅子を一組ごとに消毒▲

ことのは

NPOブックスタートのスタッフが出合った言葉

ああ。そうか、人は、声で誰かにさわりたいんだ。
そして、ふりむいてもらったり、笑ってもらったり、いっしょにあそんだりしたいんだ。
『こどもスケッチ』（おーなり由子 著・白泉社）より

息子さんが生まれて間もない頃は、赤ちゃんがしゃべるなんて想像できなかったという絵本作家のおーなりさん。でも、まるで「ここにいるよ」「みてて」と言うように「キャーッ」「アオー」と声を出し始めた息子さんの様子に、人は誰かとつながるために話すようになったのかなと感じたそうです。コロナ禍もあって、ブックスタート会場で赤ちゃんに直接ふれることは控えなければならないとしても、声でスキンシップができるといいですね！

NPOブックスタート主催
いっしょにえほん
写真コンテスト
2022 開催！

募集期間
4月20日（水）
～5月22日（日）

*応募はどなたでも！
*詳細は当NPOウェブサイト、SNSにてお知らせします